
大きな銃に小さな殺し屋

九条 ネギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな銃に小さな殺し屋

【Nコード】

N6906Y

【作者名】

九条 ネギ

【あらすじ】

近年、裏社会で最も恐れられた殺し屋。片手にマグナムと、黒いコートがその特徴とされる『カフィン』が、突如姿を消した。彼が消えた後、最強の席を一人の少女が埋める事になる。この少女は、一体……？

懺悔という名の自己満足

ごめんなさい。　ボク、悪い事をしました。
何って、簡単だよ。　ボクが君に、悪戯をした。
壊しちゃった。　捻じ曲げちゃった。

その頭は飾りか。　ボクの頭はただの飾りだ。
君の頭もただの飾りだ。　ボクから見れば。

頭どころか、ボクに身体は飾りでしかない。

君が大好きになったから、ボクに合わせて君を変えた。
さて、君の身体はどうなったのでしょうか？

朝起きたら。　事故に遭って。　氣を失って。

いつの間にか。　知らないうちに。　氣付かない内に。

君はボクの都合で、作り変えられたんだよ。

風を流れる。　小さく弱い悪魔の手にかかってね。

『君は、何も知らないお姫様になったんだ。　ボクの気まぐれに
当てられて』

懺悔という名の自己満足（後書き）

ぶっちゃけ、第三部辺りまでは暗いだけで面白みが無いかもしれないです。

ばやきと言う名の自己満足

「ブルーノの額に弾丸を撃ち込め」

依頼主は、確かにそう言った。本日のターゲットは、ブルーノと呼ばれる金髪の男。写真の通りの奴に弾丸をねじ込めば、俺の任務は完了だ。

彼はその気に入っているコートに身を包み、事務所の外に止めてあったバイクにまたがった。闇にその黒髪を馴染ませ、その青い瞳は闇に浮かぶ猫の瞳の如く。異様な雰囲気放っている。

キーを捻り、エンジンを掛けると同時。音も無く、彼は闇の中へと姿を消した。

月明かりの下で、素早く動き回る小さな影。それは、ビルの屋上から見えている所為かもしれない。

時折、火花を撒き散らすその黒いコートの男は、次々に警備員達をなぎ倒すとビルの中へと侵入した。傷など、一切負うことなく。まるで余裕の表情を崩しそうに無い。ただ、この表情は彼が明日起きた時には消えているだろう。ボクの手によって。

「中々、強いんだ」

ビル風によって吼えるような音が響く。ビルの屋上のアンテナから逆さにぶら下がる彼女は、楽しげに小さく呟いた。

「侵入者だ、銃を持ってるぞ！」

彼の侵入した一階では、大騒動が起きていた。いまこのビルの中では、とある兵器製造業者のパーティーが行われている。それを聞けば、恐らくは誰もが『兵器製造業者の主要人物を殺しに来たに違いない』と、思うことだろう。

全く持って、その通りだった。

彼は歩みを一切止めることなく、それどころかその直進を維持したまま。的確に敵の急所にその弾丸を次々と撃ち込んでいく。

彼の通った後には、硝煙の、死の匂いが残されている。

使っている銃は、いたって普通。

特注品ですらないだろう。ただの、マグナム。それも、量産されているであろう。身分証名称を持って銃器を扱う店へ買いに行けば誰もが購入可能であろう代物だった。

「俺は、お前らの頭……ブルーノに用がある。死にたくなけりや、道を明けろ」

彼の一言は、とても青年とは思えないものだった。

逆らえば、殺される。それが、殆ど確定している。並の人間で、太刀打ちできるような相手ではない。

銃を取り上げたとしたら？ いや、無理だ。奴はまだ武器を持っている。

それから、たった十分間の出来事だった。彼は標的の居るフロアに到達し、その銃の引き金に指を掛ける。標的の横に居るボディーガードも成す術は無く、ただ見守るだけだった。

「見つけたぜ、ブルーノさんよォ。面倒臭かったぞ、雑魚の相手は」

その銃口の先には、金髪の男が。無念といった様子で、立ちすくんでいた。

「貴様……カフィンか!？」

その男の口から、そんな言葉が吐き出される。

「ああ、俺はそう名乗った覚えは無いが。そう呼ばれている。

……俺も、使われる人間なんだ、悪く思ふなよ」

爆竹のような爆発音が、そのテーブルに並んだワイングラスを貫き、砕く。

銃口から吐き出される小さな衝撃波に、彼の黒髪が揺れる。青い瞳は、瞬きをすることなく。その弾丸が、ブルーノの額にめり込む所まで。そして、紅い液体を吐き出す所まで。ハッキリと、その瞳で確認する。

「さて、任務官完了か。……そこのゴリラ」

ため息をつく、カフィンがボディーガードの一人に札束を投げ渡した。相当な額らしく、啞然とするほか無い。という、意図で……？

「これは……？」

「仕事ご苦労さん、依頼主が死んだら報酬が無いだろ？ 大人しくしてた札だ、俺が払ってやる。それと、早い所その馬鹿ブルーノを持って帰ったほうがいいぜ？ 俺は依頼で“ブルーノの額に弾丸を撃ち込め”と言われて来てるんだ、何て弾だろうがその辺は俺の自由。

さて、俺は早い所、警察が来る前に撤退させてもらうぜ」

それだけ言い残すと、彼は窓ガラスを突き破り、闇の中へと姿を消した。

ぼやきと言う名の自己満足（後書き）

ブルーノ・デイヴィー

性別 男

職業 兵器製造会社の社長にして、兵器の密売人

侵入者という名の自己満足

行きと同様、彼はバイクで帰宅した。音の出ないよう加工しているらしく、電気エンジンにサイレンサーをつけたような。黒いボディであるのも相まって、それは闇の中では不可視にも近いステルス性能を発揮していた。

だが、そんな小さなことは、彼のオプションでしかない。

彼の真骨頂はその圧倒的な強さと技能にあり、ステルスバイクなどは面倒ごとを避ける無駄な小細工でしかなかった。

キーを引き抜き、事務所の敷地に入れる。事務所の鍵を取り出すと、彼は面倒くさそうに顔をしかめた。取り出した鍵は、直径五センチ程度のリングにざっと十個以上。そして、扉に設けられた鍵穴はそれの二倍。二十個。

そして、この鍵穴は単純に。一つの鍵で二つの鉤をあけるのではない。ランダムに、一つの鍵で最低一つの鍵穴を開ける。そして、その組み合わせは優に二百通りが存在する。

そして、その組み合わせはカフィンしか知らない。もし、扉を爆破して侵入しようものなら炎熱反応で作動する機関銃の餌食である。

その面倒くさい鍵をあけ終わると、彼はその瞳を凝らし、

「誰だ、何処から入った？」

闇の中に居る“何か”に対し、問いかける。傘立に、見たこともないような白い傘が刺さっている。

そして、もう一つ。“何か”がいるという情報を、匂いが伝えている。淹れたばかりのコーヒーの匂いと、もう一つ。揺り椅子の椅子のきしむような音。

……何者だ？ 開錠して入ったか……？ いや、あれを外すには相当時間が掛かる。それこそ、今しがた外出した一時間弱の時間だけで開ける事はまず無理だ。

何だ？ 『幹部』の……指令伝達であれば有り得ない事ではないが、俺に顔を合わせる決まりがある。闇に紛れていれば、俺が撃ち殺すという行為に出ても良い決まりだ。なのに、その危険を冒すのか？

そこまで考えれば、『幹部』とは関係ない部外者が、この事務所に不法侵入したと考えるのが最も理由としては辻褄が合う。

「三秒だけくれてやる、居れば居ると言え」

静かに、腰に挿していたマグナムを手に握った。

「三」

安全装置を外し、撃鉄を引く。

「二」

気配の元に、銃を向けた。

「一」

「ゼロ？ 居るよ、居る居る。チョット待って、暗くて見えなくってさ」

高い、女の声。そして、闇の中を慌しく歩き回ると、こういうわけかその女は壁を叩き始めた。一体、何をやっている？

二秒ほど叩き続け、突然。事務所の電気が点いた。

どうやら、スイッチを探していただけらしい。

「いやー、久しぶりだね。アレン」

明かりがついた中に立っていたのは、金髪の少女。どうしてだ？

「何で、俺の名前を知ってんだ？ ……何処の人間だ？」

アレンの言葉に、彼女は特に怖がる様子も無くテーブルにおいてあった写真立を手を取った。アレンの、幼い頃の写真。孤児院の仲間と、一緒に映っている。

目の前の彼女と同じ、白いコートの女の子。……誰だ？

「まさか、ユリアか？ ……よくここが分かったな、どうやって調べた？」

アレンは驚いたようにユリアと呼んだ少女に向けていた攻撃的な視線を引っ込めた。久々の、客。

それも、自分と同じ人間が来ることなど滅多にない。
殺し屋でも少し、嬉しかったりする。

「いや、ボクはアレンを探してたわけじゃ……無いって言えば嘘になるかな。ボクさ、君と同じで殺し屋……やってるんだけど……」

楽しげだった彼女の表情が、一気に曇る。どうやら、個々に来た原因を話したくは無いらしい。だが、話してもらわなければこっちも状況の把握が出来ない。

「どうした？ 俺を殺せてって依頼でも受けたか？」

アレンは冗談混じりにユリアに問いかける。だが、ユリアからの返事は無い。

むしろ、冗談を言う前といった後で、明らかに。ユリアの表情は曇っていた。

「……そうなんだ。ボク、君を殺せてって依頼を受けたんだよ」

「んあ？ マジだったか、そうか。んあッハッハ！ 大丈夫だ、殺そうとしても返り討ちにしてやる」

アレンは楽しげに笑うと、ユリアの表情が少し楽になったような気がした。

そのまま、アレンは言葉を続けた。

「構わないぜ？ 俺は、誰にも殺されねえ。……お前も、殺すつもりはねえよ」

そんな言葉と同時だった。……殺人鬼という生き物は、敵であればどんな人間に対してであれ。非情になれるものだ。

手に握ったままだったマグナムの銃口を、一瞬の内にユリアの胸元に向けたかと思うと、発砲。赤い液体が飛び散り、ユリアの身体は仰向けに倒れた。

「……な、殺しちゃいねえだろ？ 少し痛かったかも知れねえけどよ、俺は人を殺すつもりはねえよ」

アレンの言葉の直後、ユリアは驚いた様子で起き上がった。
ユリアの胸元を紅く染めるそれは、油性マーカーのような匂いが

する。ペンキではないようだが……ペイント弾？

「今日の依頼も、そうだ。結構強い麻酔仕込んであるが、殺傷力は殆どゼロだ。痛かったらごめんな」

「いつも、こうやって誤魔化してきたの？」

ユリアの問いに、アレンは楽しげに頷いた。アレンが頭を上げると同時、ユリアは目の前で。アレンの胸元に銃口を突きつけていた。

アレンの銃は、アレンの手に。つまり、この銃はユリアのもの。

「悪く思わないでね、少し痛いだけだから。仕返しだよ」

発砲音。そして、銃口から立ち上る煙。確かに、死にはしないが少し痛い。

「……なんだよ、お前も……れ？ ずいぶん……強い麻酔……だ……な……」

その言葉が終わる前に、アレンはうつ伏せに床に倒れた。

「あれ？ ……実弾と間違えたかな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6906y/>

大きな銃に小さな殺し屋

2011年11月21日09時36分発行